

## (2) マデロ革命

### フランシスコ・マデロ

フランシスコ・イグナチオ・マデロはメキシコで五本の指に入る資産家の相続人として生まれた。マデロ財閥を築いたフランシスコの祖父エバリスト・マデロはコアウイラ州でぶどう園、綿花栽培、繊維工場などを経営したパラス産業会社をはじめ、全国各地に鉱山、紡績工場、銀行、牧畜、石炭会社、ゴム園、鋳物工場などを設立し、一大産業帝国を作り上げた。フランシスコは1873年10月30日、コアウイラ州パラスにあるアシエンダ・デル・ロサリオでエバリストの長男と妻メルセデスの間に生まれた。小柄で病弱であった彼は、十二歳でサルティヨのイエズス会系の学校に入り、アメリカで学んだ後、数年をフランスで過ごし、ヨーロッパ各地を旅した。彼はその間、当時流行していた心靈論に出会い、そのことを自分の人生で最も重要な発見であったと語った。彼はパリで経営学課程を終了していたが、父と祖父の意向によりカリフォルニア大学バークレーで仕上げをすることになり、農業技術を習得しながら、英語に磨きをかけた。しかし、ここでもマデロが最も関心を示したのは心靈論と倫理であった。当時バークレーでは「進歩主義的特別講座」という、キリスト教の倫理を社会問題に適用する試みが行われていた。<sup>1</sup>

1893年の終わり、フランシスコはコアウイラ州サンペドロ・デ・ラス・コロニアスにある家族のアシエンダに戻り経営を任された。彼は最早ひ弱な少年ではなく、快活で精力的な活動家となり、綿花の作付け、石炭や製氷工場、そして気象観測所の建設など様々なプロジェクトと取り組んだ。彼は有能な経営者で1899年、彼の個人資産は五十万ペソにも達した。慈善活動はマデロ家の伝統であったが、フランシスコは特に熱心で、父と叔父から薬草を学び、薬袋を携えて農夫の家を頻りに訪れた。フランシスコは修道士のように質素なサンペドロの家では、六十人ほどの若者を養っていた。彼のアシエンダで働く者は清潔な家に住み、十分な給金に恵まれ、定期的な健康診断を受けていた。1903年1月、サラ・ペレスと結婚したマデロは孤児を養い、奨学金を与え、学校、病院、地域の人たちのための炊事場を建てた。昼間は事業と慈善に精を出し、夜は心靈術に耽っていたマデロは或る日、四歳のときに事故で焼死した弟ラウルの声聞くようになった。それ以来彼は重要な決断をしたときには、ラウルの指示に従ったという。肉食主義者となったフランシスコは、喫煙を止め、自分の酒蔵のワインを潰した。<sup>2</sup>

1903年4月2日、隣州ヌエヴォ・レオンの知事ベルナルド・レイエスが政治デモを暴力で制圧したというニュースを耳にしたマデロは衝撃を受けた。その数ヵ月後、ラウルの声がマデロの目を政治の世界に向けさせ、市民同朋のために善を行う事を促した。マデロは政治を広い意味で慈善と受け止め1904年、ベニート・フワレス民主クラブを結成

して地方選挙に出馬して落選した。<sup>3</sup>

1905年、ミゲル・カルデナスはコアウイラ州知事として三選目を迎えようとしていた。カルデナスは、マデロが政治信念と財力で将来問題を引き起こす恐れが十分にあることを、ポルフィリオ・ディアス大統領に警告した。ミゲル・カルデナスにとって心配の種であったのは、マデロが選挙の対抗馬フルメンシオ・フエンテスを応援し、複数の政治新聞に資金援助をしていることであった。ディアスは北部地域総司令官ベルナルド・レイェスにマデロ投獄を打診したが、レイェスは反対し、強力な騎兵隊を選挙区へ送り込めば、マデロは家族に説得されるであろうと回答した。このレイェスはのち、マデロ革命政府にたいするクーデターを計画した張本人である。

九月中旬の選挙では予想通り公認候補が当選した。マデロは二つの選挙に失敗したが、彼の信念は挫けなかった。1907年暮れ、彼は本の執筆に取り掛かった。マデロはマニフェストを掲げたのではなく、雄叫びを上げたのでもなく、書物という異常な形で国政に参入した。執筆して一年後「1910年の大統領継承」と題した初版は瞬く間に売り切れた。<sup>4</sup>

マデロはメキシコの現状を分析し、十九世紀を通して我が国を荒廃させた軍事主義、この絶対的権力は一人の人間によって握られ、そのような権力が真の発展を支える事はできないし、絶対に公平を保てる人間など居るはずが無いと主張した。マデロは日本を引き合いに出し、小国が民主主義で防備を固め、ロシア帝国に屈辱を与えたと書いた。1871年、ディアス自身が再選反対を唱えて戦ったことを忘れ、今ではどんな犠牲を払ってでも権力にしがみついていることを責めた。物質的な発展は遂げたが自由は犠牲にされたこと、農業は進歩したが穀物の輸入は欠かせないこと、工業は活発になったが独占的で従属的、疑いも無く平和であったが全ての政治活動が禁じられていた、としてマデロは僅かながらディアスの功績を認めた。一方、ディアスの責任としたのは、ヤキ・インディアンを奴隷にしたこと、カナネアやリオブランコでの労働者の弾圧、一向に減らない文盲、過剰な米国との関係、極端な中央集権主義であった。マデロは1857年憲法に戻り、人は法の前で平等であることを基本とし、民意を反映した政治を行わない限り、メキシコは破滅に向かうと警告した。1909年2月、マデロは手紙を添えてディアスに本を贈った。<sup>5</sup>

1909年5月、マデロは再選反対運動本部をメキシコ市に設置した。その翌月、機関紙「反再選」の第一号が二人の識者、ルイス・カブレラとホセ・バスコンセロにより発行された。この二人は後にメキシコの重要な政治家となった。マデロは既にかんりの資産を手放して運動資金にあて、僅かな随員を伴って全国行脚を開始していた。全国各地で反再選クラブが結成され、行く先々で官憲の妨害を受けながらも、熱烈な歓迎を受けた。丁度この頃、大統領選挙に出馬を表明していたベルナルド・レイェスは、ディアスからヨーロッパ駐在武官の要職に任命された。ディアスから危険人物と見做されたのである。<sup>6</sup>

新政党の全国大会の前あたりから、中央政府はマデロの祖父に対して圧力を掛け、ヌエ

ヴォ・レオン銀行に介入した。マデロ自身にも違法なゴムの取引があったとして逮捕しようとしたが、マデロ一家と親密な間柄であったディアスの経済相ホセ・リマントゥールの介入で命令は撤回された。1910年4月の反再選党総会の前日、マデロはディアスと面会した。ディアスはまるで子供か無知な田舎者のようで、この男にかかったら何も出来ない、マデロはそのときの印象を語った。マデロはもともと革命を考えず、選挙による民主的な改革を目標としていたが、このときの演説で「力は力で受ける」と言明した。反再選派は驚くほどの速さで増え、集会はいよいよ危険を伴ってきた。プエブラでは三万人、ハラパでは一万人、死者が出たリオブランコでは二万の群集が集まった。マデロは改革戦争やフランス介入戦争で掲げた自由主義思想を再び蘇らせた。六月の初め、マデロはモンテレーで逮捕され、サン・ルイス・ポトシの刑務所に収容され、一月後ディアスは再選された。マデロ支持者は選挙違反の詳細なメモを数多く議会に提出したが、握り潰された。7

マデロが幽閉されていた九月、二重の祝賀行事が行われ、メキシコ市をはじめ全国各地は祭り一色になった。メキシコ独立百周年記念とポルフィリオ・ディアス大統領八十歳の誕生日であった。ディアスは1907年、百周年記念委員会を設置して入念に準備を進めてきた。祝宴、愛国的儀式、園遊会、屋外フェスティバル、軍楽隊の行進などが連日行われた。15日にはメキシコの各時代を象徴した仮装行列が行われた。パレードはプラザ・デ・リフォルマからアベニダ・フアレスを通りプラザ・デ・ラ・コンスティテューションまでであった。その夜十一時、大統領はソカロで独立を知らせる鐘を鳴らし、集まった群衆はピバ・メヒコを叫んだ。8 メキシコと外交関係のある殆どの国が特使を送り込んだ。清国は市内の目抜き通りに大きな時計台を寄贈、フランス、ドイツ、アルゼンチン、ブラジルからはそれぞれ軍艦を仕立てて祝賀に駆けつけ、四カ国合同で一万の隊列を組んでフアレス通りを行進した。日本からは内田康哉男爵が夫人をはじめ田中陸軍武官、平賀海軍武官、高橋三等書記官ら五人からなる奉祝使節団を組み、九月三日ヌエヴォ・ラレドからアメリカ合衆国の特使とともに特別列車でメキシコ市に入った。日本からの引き出物は高さ一メートルの薩摩焼の花瓶一对。一行は、アメリカ、ドイツ、イタリア、清国からの特使と打ち揃い、外務省からソカロの大統領府までを馬車で行進した。9

メキシコの特別な好意により、国際イベントとして日本のみが日本博覧会を開催することが出来た。開会期間は九月二日から十月三十日まで、開会式には大統領夫妻を初め政府要人、各国の特使や外交団も多数出席、これを出迎えた日本側代表は堀口九萬一公使であった。会場の入り口には日墨両国旗が飾られ、大統領が会場に到着するとメキシコ国歌が吹奏され、二十一発の礼砲が轟いた。会場には日本の物産が所狭しと並んでいて、薩摩、伊万里などの陶磁器、漆工芸品、屏風、織物など伝統工芸、美術品の数々が出展され、着物を着た日本女性やチナ・ポプラーナを纏ったメキシコ女性が接待に当たった。10

お祭り騒ぎが終わり、チワワでは銃声が聞かれ、暗雲が次第に空を覆ってきた12月1

0日、ディアスは大統領に就任した。就任は八度目、任期満了時には八十六歳になるはずであった。間もなくメキシコの人々は平和から無政府状態へ、豊かさから貧困へ、そして国際的孤立へと転落する。<sup>11</sup>

1. Enrique Krauze, "Mexico, Biography of Power, A History of Modern Mexico, 1910-1996, 1997, P245
2. Ibid. P247
3. Ibid. P248
4. Ibid. P249
5. Ibid. P252
6. Ibid. P253
7. Ibid. P254
8. William H. Beezley/David E. Lorey, "Viva Mexico! Viva La Independencia!", Scholarly Resources Inc., 2001, P169
9. 日墨協会・日墨交流史編纂委員会「日墨交流史」現代企画室、1990, P132
10. Ibid. P133
11. Enrique Krauze, "Mexico, Biography of Power, a History of Modern Mexico, 1910-1996, 1997, P236

[目次へ戻る](#)